野研びより

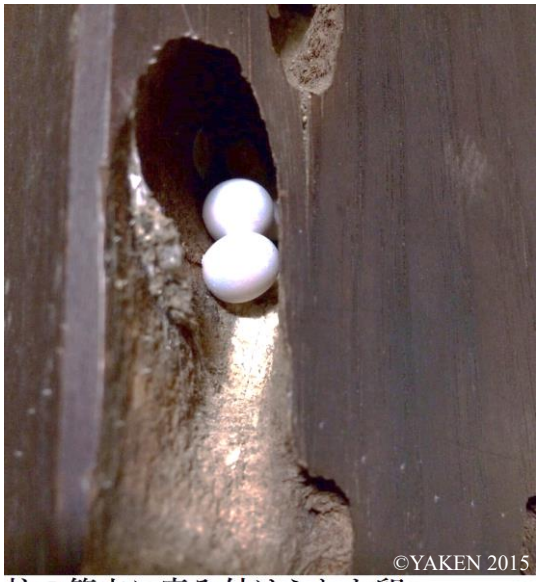
爬虫類編
野外生物生態調査研究部 水生生物班
2017年　8月

(2016年8月　島根県益田市撮影)

ニホンヤモリ Gekko japonicus
有鱗目 トカゲ亜科 ヤモリ属

　ガラス戸の代わりに障子、電灯の代わりに行灯。そんな風にして、昔の人も今と同じように見ていたのでしょうか？
宮(みや)を守るからミヤモリ、転じてヤモリ。この宮崎には良く合った名前の生き物だと思いませんか？
ヤモリは日本中に広く分布していて、特に身近な爬虫類だと思います。夏の夜にはよく光に惹かれて窓ガラスに付いていますね。そんなヤモリさんの紹介です。

　ニホンヤモリは代表的なシナントロープ(人間の生活スタイルの一部を利用して繁栄している生物)で、よく家屋に住み付き、光に集まる羽虫やそれを食べに集まるクモなどを食べています。人間には特に害を及ぼさず、たまに突然降って来て驚かせてくる、お茶目な奴らです。
よく似た形態のニホントカゲは人間の手があまり入らない野原に多く、都市部ではあまり見られません。逆にヤモリは住宅地に多く、野原には殆ど生息していません。この差は指先にあります。ニホントカゲの指は平地を走り回るために細長く、ヤモリの指は壁に張り付くために平たく潰れたような形になっています。これによりヤモリは開発によって作られた障害物を越えて餌場や多くの仲間がいる場所を行き来でき、安定して繁殖できているのです。まるで人間についてくるように繁栄しているヤモリさんです。



柱の節穴に産み付けられた卵
(2015年8月　島根県益田市撮影)

　平安時代の人たちは、事あるごとに歌を詠みます。女性を見れば、綺麗な景色を見れば、悲しいことがあれば、喜ばしいことがあれば、とにかく心が動けば歌を詠んでいました。カエルや魚、小鳥などの小さな生き物について詠まれた歌も多く残っています。けれども、そう珍しくもないこのとかげを詠んだ歌はその時代には(わかる限りでは)残されていません。平安の貴族たちの風流を好む心は、なぜ夜の明かり障子のヤモリには向けられなかったのでしょうか？

(2016年8月　島根県益田市撮影)

　はっきりした理由は見つかりませんでしたが、調べてみたところ日本のヤモリの DNA は、朝鮮半島に生息するヤモリと同一種レベルで近いそうです。これは、両者がごく近い時代に生息域が分けられたことを示します。つまり、平安時代の日本にはニホンヤモリはおらず、それ以降に流入した、と考えられます。個人の想像ですが、中国との交易が盛んになった室町時代の初期頃かなー、と考えています。